みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Notes on Senaka-ate

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 俊亀智 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004506

背中あての諸形態

——国立民族学博物館所蔵の標本資料によって——

中　村　俊亀智*

Notes on *Senaka-ate*

Shunkichi NAKAMURA

Senaka-ate is a cushioning pad used for carrying on the back agricultural and forestry products. It is generally made of the rice straw. *Senaka-ate* are classified into six types according to weaving technique, most of which are commonly used for traditional Japanese mats or bags.

Ⅰ．分析方法
Ⅱ．標本資料の分析例
Ⅲ．若干の考察

Ⅰ．分　析　方　法

背負運搬のときクッションとして背中にあてる在来の生活用具（それはところによってセナカアテ，ネコ，ネコカケ，セナカガチ，セナカチ，セナコウジ，バンドリなどとよばれている）を総称して，これまでの民具研究では，背中あて（背中当）とよびならわしている。

これまでの資料によって，この用具は東北や北陸地方を中心に，背負縄，背負梯子，背負籠などとともに主要な背負運搬具のひとつとして，さかんにつかわれたことがたしかめられている。

この報告は現在国立民族学博物館に所蔵されている旧文部省史料館所蔵の標本資料によって，ワラを素材とした背中あての形態がどのようなものであり，それはどのようにして編まれているかを検討したものである。

* 国立民族学博物館第4研究部

検討にあたっては，とくにつぎの点に注意した。

1　背中あての形や編み方は，全体の大きさや材料とふかく関係している。そこで今回の分析では一点一点の標本資料にあたり，その最大長，最大幅（横幅），厚さ，重さ，各部分間の比例関係をたしかめ，全体の写真を参照し，各部分間の連続関係をたしかめた[1]。

2　そのさい，背中あての形や編み方をつぎのような用語によって記述し，おのおのの標本資料の特徴をあきらかにするよう試みた。本来ならそれらに加えて，もとの収集された場所へいってみて，その作り方を実際に見聞きし，その結果をつきあわせてみなければならないが，ここではとりあえず標本資料の分析結果のみ報告することにした。

まず背中あては直接背中にかかる部分，肩から胸や腹部にかかる部分，それに結び縄，負い縄（緒）にあたる部分にわかれるものとし，ここではとりあえず背中にかかる部分を甲，肩から胸や腹部にかかる部分を手，負い縄の部分を結び縄ということにした。

背中あての全長とは，手を上にして手と甲とをのばしたときの手のさきから甲の端（甲の裾）までの長さとし，手のさきについている結び縄は含まないものとした。

同様に背中あての横幅とは，手を上にして甲と手をのばしたとき，もっとも幅がひろい部分の値をとることにした。

3　一般にワラ細工はタテとヨコとの要素を，あるときはムシロバタやネコワク，コモケタのような道具をつかい，あるときには手だけで，規則的組織的にくりかえしたものだといえる。ワラ細工にはそのほか縄編のような手法があるが，いまタテに（タテは標本資料を机の上や壁にかけたときの垂直方向，背中あてなら手を上にして壁にかけたときの手から甲の裾におろした垂線の方向に）数本の縄を張り（これをタテ縄という），これにヨコをかけてゆくと，ヨコのかけ方によって各種の文様がうまれる。そのやり方をここでは編み方という。編み方にはいくつかの形式がある。

1) 木工の指物のようなものでは，全体はいくつかの部材を組みあわせ，接合することによって成りたつ。その接合の方法には，縄で結ぶこともあろうし，釘やネジでとめる場合，ホゾをつくってはめこむ方法などがある。こうした接合関係に対して，カゴ細工やワラ細工では，たとえば底をアジロに組み，その部材の一部をいかし，胴を底とは別な編み方で編み，それにまた新しいタケを加えて縁を編むというように，編み方をかえながら，全体をつくりあげてゆく。このような部分間の関係を，ここでは連続関係といってみた。なおワラ細工はこれまで，とかくあつかいにくい分野とされてきたが，それは，ワラ細工には，木工やさらには竹細工とちがい，いわゆるみようみまねでならいおぼえねばならない部分がおおく，部分に特定の術語をあたえたり，連続関係を術語でいいあらわしたりすることが，それほど必要とされなかったからかもしれない。そこでここでは分析に必要なかぎりの用語を，とりあえずつかうことにした。

タテに1本のヨコを1本くぐり1本とばしでかけてゆくと，織物の平織，竹細工の笊目編や四つ目編がえられ，タテにヨコをずらしてゆくとアジロ編のようになる。

タテに2本のヨコを，タテをヨコでとりこむようにしてかけてゆくやり方は双子編といわれる。その場合，ヨコをねじってかけると敷物のネコの編み方になり，全面に矢羽根文様を生ずる。これをここではネコ編という。また双子編のタテヨコをいれかえ，タテでヨコを編んでゆくと炭俵などの編み方となる。これを俵編という。俵編の一種には立涌(たちわく)編がある。

ワラジ（草鞋）や草履の台の編み方は一種の平織であるが，ワラ細工の特性をおもくみて，ここでは独立に草鞋編ということにした。

なお，タテ縄に対するヨコをヨコワラということにした。

4　この報告では当該標本資料のなかから代表と思われる例を16例あげ，最初に品名，標本番号，収蔵原簿番号（文部省史料館でつかわれていた標本の番号で収集番号といわれていたもの [史料館　1967: 61–74]），収蔵棚番号を国立民族学博物館情報管理施設の記録によって示し，その標本資料の来歴，大きさ，各部分の割合，編み方などをのべてみた。

収蔵棚番号はたとえば（2収–1E–6–5）のように記し，第2収蔵庫の第1行Eブロックの6列目の棚の下から5段目にあることを示した。

5　ここでとりあげた背中あてのなかにも，収集地やもとの所用地，呼び名などがあきらかでないものが含まれているが，これは，かつてこれらの標本資料が収集された際，たとえば県名のみがわかっていて町村字名をききもらしたような場合，厳密をきするあまり，これを一時不明として処置したことなどにもとづいている。それゆえ，収集地，所用地などが不明だからといってこれらの標本資料の利用価値が，まったくなくなったというわけではない。

本文ののちの図版は，国立民族学博物館情報管理施設の原板を利用させていただいた。

Ⅱ．標本資料の分析例

例1　[品名] ネゴ　[標本番号] H 16367　[収蔵原簿番号] 3474　（2収–1E–6–5）

1933年9月，渋沢敬三氏によって秋田県仙北郡角館町で収集されたものである。甲の横幅は 26.5 cm，甲の長さはその 1.89倍，手の長さは 1.51倍，厚さ約 3 cm，重さ 0.6 kg で甲の輪郭は v 字形，編み方はネコ編を主としている。ネコ編の背中あてに

は，その輪郭がこの例のようにv字形をていするものと，後にあげる例6のようにU字形をていするものとがあるが，この例には，前者の典型的な手法をみいだすことができる。

甲のネコ編のタテ縄は，縁の分も含めて10本で太さ3 mmほど，タテ縄同志の間隔はおよそ2.5 cmで，中央の2本は裾から首のうしろのところまでゆき，それからからまりあって縄になり，両端は両手のなかに編みこまれている。これに対し残りの8本は裾から手のさきまで通り，やがて手のさきに取りつけられた結び縄の部分へとつながってゆく。

甲の編みはじめの部分（裾の部分）7段は，ヨコワラの幅も5.5 cmで，その上の部分に比べてかなりせまく，固く編んである。裾の部分から上はヨコワラの幅は約1 cmとなる。

手の幅は7ないし10 cmで，その先端の部分には幅1.5 cmの赤い布が編みこんである。この部分は結び縄の取りつけ部分にあたり，両腹部前側にかかる部分なので，このように色どりをそえ，同時に編み目を補強するため，このような心づかいをしたのかと思われる。

結び縄は直径7 mmないし1.5 cmで，甲までの長さは35 cm。丸三つ組である。

甲も手も縁はタテ縄にヨコワラを組みこみ，太さ3 cm内外の太い縁をつくりあげている。また甲のまんなかから，ヨコワラの一部を表側に出し，ちょうど毛羽のようにその端を切り揃える。このような手法は，他の地方のこの種の背中あてに，ほぼ共通にみることができる。

例2　[品名] 背中当　[標本番号] H 27022　[収蔵原簿番号] 23407　(2収-1L-17-2)

例1より27年後の1960年7月，同じ秋田県角館町で買いもとめたものである。もとの呼び名をセナカアテ，またはネコ（ネゴ）といい，甲の横幅は例1とほとんどかわらず27 cmで，長さはその1.74倍，手の長さは例1と同じ値で，甲の横幅の1.48倍，重さは例1よりやや重く0.8 kg。素材はワラで，たとえば野菜かごなどを背負うとき背中につけるという。

タテ縄は太さ3 mmのワラを，いっしょによりあわせたもので，約2 cmの間隔で10本。そのうちのまんなかの2本は，首のうしろのところで，中心線上にそって7 cmほど縄になり，両端は両手のヨコワラのなかに編みこみ，残りのタテ縄は裾から手を通って結び縄につづいている。

甲の下端は幅 1 cm の三つ平組で，この標本資料ではそれにタテ縄をかけてゆく様子が比較的はっきりとみられる。この背中あてでも，裾の部分 6 cm ほどは，その上の部分にくらべてヨコワラの幅をせまくし，固く編みこまれている。その上の部分では，ヨコワラの幅はほぼ 1 cm となっている。

手の部分は横幅 10 cm。そのさきは三つ丸組になり，結び縄となって甲の縁まで達し，一度縁にかけたのち，甲の表側のまんなかで両端を結びあわせてとめている。この結び縄を甲の縁にとおすところには，幅 1.3 cm の黒い切れを編みこんで補強している。

甲から手にかけての縁は太さ約 3 cm。甲の表側には，まんなかからヨコワラの末端を甲の外側に 10 cm ほど出して切りそろえている。例 1 と編み方や大きさなど，ほとんどかわらないが，まだ新しいせいもあり，全体としていっそうはなやかな雰囲気をかもしだしている。

例 3　[品名] 猫カケ　[標本番号] H 23034　[収蔵原簿番号] 15722　(2 収－1J－17–5)

これまでの例 1 や例 2 は東北地方の日本海側から収集されたものであったが，同じようなネコ編の背中あては東北地方の太平洋側の地方でも，さかんにつかわれている。ここでは，その一例として岩手県上閉伊郡遠野市で収集されたものをあげておく。甲の横幅は 27 cm, 長さはその2. 22倍，手の長さは1. 11倍，厚さは 2.5 cm, 重さは 0.8 kg である。甲の輪郭は前 2 例と同じように v 字形である。ただし，甲と手の縁の太さは 2.5 cm でややせまく，甲の中心部はむしろ薄めに編んであり，しかも全体として編み方の密度がきわめてたかく，甲の毛羽のたてかたも，ごくひかえめである。

タテ縄は幅 7 mm で意外にひろく，本数は10本。そのうち外側の 2 本は縁にはいり，中央の 2 本は首のうしろのところで結びつき，その両側のタテ縄が甲と手との共通のタテ縄になる。この背中あてでは，別に甲と手の境にヨコ縄が 1 本はいっていて，それが中央 2 本がつくる結び目をぬけてゆく。この甲と手との境界部分は入念に編んである。甲のヨコワラの幅は約 1 cm である。

手のさきの結び縄の部分の長さは 30 cm ほどで，その編み方は三つ丸組である。

さきにも述べたように，甲の裾の部分 10 cm ほどは，ヨコワラの幅がせまく緻密である。甲のまんなかの毛羽の長さは約 4 cm にすぎず，また甲から手にかけて，幅 3 cm ほどの黒ずんだ布を 8 本いれて，色どりをそえている。

例4　[品名] ニゴザ　[標本番号] H 18675　[収蔵原簿番号] 7011　(2収-1G-5-3)

ネコ編の背中あては，北陸地方でも収集されている。ここには，そのうちの2例をあげる。最初の例は，1936年10月，山口和雄氏によって富山県氷見郡阿尾村阿尾（現在氷見市）で収集されたものである。

甲の横幅は 25 cm，長さはその2.04倍，手の長さは約 2.5倍，厚さ 2.5 cm，重さ 1.1 kg。肩のあたりがもっとも幅がひろく，腰にゆくにしたがってやや狭くなり，裾はおだやかに半円形の曲線をえがいてまとめられている。

タテ縄は両側の縁の分も含めて10本で，そのうち首筋にかかるまんなかの2本は，最後に組みあわされて手のもとの部分を引きとめている。ヨコワラがつくる矢羽根の幅は 8 mm 前後で，全体としてかたく編まれている。甲の編みはじめの裾の部分には三つ平組がみられ，それから4段ほど上までは，主要部よりも矢羽根の幅が狭くなっている。

甲の表側の毛羽は，これまでの秋田県収集の標本資料などとはすこしちがい，中央2列をのこし，端がその両側に出るように編んである。

結び縄は太さ3ないし 8 mm の縄を三つ丸組にしたもので，手のさきから甲までの長さは 25 cm。その末端は，甲の下端から 17 cm 上のところで甲の縁をぬけ，甲の表側のまんなかで結びあわせるようになっている。

例5　[品名] セナカツ　[標本番号] H 18138　[収蔵原簿番号] 6394　(2収-1F-4-2)

セナカチともいい，高岡銀行上市支店によって富山県新川郡上市町で収集されたものだという。収蔵年月日は1936年7月22日となっており，浅香治太郎氏の寄贈と記録されている。

甲の横幅は 29 cm，長さはその1.9倍，手の長さも甲の長さも同じ値で，厚さは 2.5 cm，重さは例4よりもやや軽く 0.85 kg，編み方は，やはりネコ編である。ただし甲の形は例4とはやや異なり，背中から腰になるにしたがって，かなり急速にせばまり，裾の下端はわずかに 10 cm の幅しかない。

タテ縄の太さは約 0.5 cm で，本数は縁の分もいれて12本。そのうちの4本が首筋までゆき，残りは手のタテ縄になってゆく。

ヨコワラの幅は 7 mm ほどで，編みはじめの裾の部分の矢羽根の幅は 0.5 cm。それが20段つづき，その後やっと主要部分の矢羽根の幅（約 1 cm）に近づいてくる。

縁の太さは 2 cm 以下で，これまでの例にくらべてやや細く，逆に手から背中にかけての部分は太く，腰から裾までの部分は細めに（その下端ではわずか 3 mm）編んである。

結び縄は太さ 5 mm の縄を三つ丸組にしたもので，甲までの長さは 22 cm ほど。裾から 27 cm ほど上に取りつけられている輪のなかをぬけ，下腹のあたりで両端を結んでとめるようにしている。

使いこまれたためか，全体として黒ずみ，表面は毛羽だち，首筋のあたりはほつれ，結び縄の片方は新しいのととりかえられている。

例6　[品名] 背中あて　[標本番号] H 15706　[収蔵原簿番号] 2729　(2収–1D–9–4)

これまでの例では，いずれも甲の輪郭は v 字形をていしていたが，この標本資料では U 字形ないしは隅丸の矩形となっている。このような例は他に 2 例みられる。1931年 6 月，AM（アチックミューゼアム）同人によって青森県北津軽郡小泊村で収集されたものという（ただしもとの呼び名は記録には記載されていない）。

甲の横幅は 28 cm，長さはその2.1倍，手の長さは1.43倍，手の幅は約 6.5 cm，厚さは約 1 cm で全体的に均一。これは背中あてのなかでも，とくに薄い部類に属している。こうした傾向は，他の同じ形の背中あてについても同じようである。重さは 0.8 kg である。

タテ縄は幅約 6 mm で，太さ 3 mm ほどのものを 2 本よりあわせたもの。その本数は12本で，まんなかの部分の 4 本と，その両側の 4 本ずつからなり，両側の 4 本はそれぞれ甲の裾から手のさきまで通り，やがて手の先端でひとつにまとまって四つ丸組になり，結び縄になってゆく。結び縄は太さ 1 ないし 1.5 cm で，甲の裾から 22 cm ほど上のところで甲の編み目のなかをぬけ，甲の表側で両端を結んでとめている。

それに対し，まんなかのタテ縄 4 本は，2 本ずついっしょになって二つ丸組。太さ約 1 cm ほどの縄になり，それが中心線上で交叉し，最後は手の部分に編みこまれている。

甲のヨコワラは幅 1 cm，編み方はネコ編。手は甲よりも一層丈夫な草鞋編で，ヨコワラは細かくほぐして編みつけてゆく。

縁はこれまでの例とは異なり，ヨコワラをねじって外側のタテ縄にかけ，ユーターンさせてゆく。

使いこまれたためか，収集されてから年月がたっているためか，全体として黒ずん

できている。しかし手の編みはじめの部分には幅2ないし3cmの黒い布を編みこむなど，随所に細かい心づかいがなされている。しかもなお全体としてひかえ目に，着実にまとめられている。

例7　[品名] 背中当　[標本番号] H 16034　[収蔵原簿番号] 3070　(2収–1D–4–2)

もとの呼び名はセナカアテで，1933年2月，早川孝太郎氏によって新潟県刈羽郡柏崎町（現柏崎市）で収集されたものという。

甲の横幅は31 cm，長さは1.97倍，手の長さは0.81倍，これまでの例にくらべて手の長さがやや短かく，厚さ1 cm，重さ0.5 kg，甲の形は短冊形となっている。標本自体が枯れてきているせいか，全体としてきめこまかい感じをうける。甲の背中にあたる部分は二重に編んである。

タテ縄は幅5 mm（ただし縄になっていない），本数は9本で，両側の3本ずつが手のタテ縄につづいている。ヨコワラも幅5 mmで，あたかも俵を編むときの編み方と同じようにヨコをタテでかがってゆく。甲の裾から20 cmほどすると，そこから上は二重になり，表側の甲の内側に，長さ40 cm，横幅30 cmの短かい甲が取りつけられている。この内側の甲の編み方は甲の編み方と同じであるが，この短かい甲は，最初からすでに取りつけられていたものか，あるいは表側の長い甲のまんなかがほつれたためか，それを被覆する目的でそうしたものか，短い甲は長い甲のまんなかに，草鞋の台でも編むときのように約5 cmの幅でワラを互いちがいに組み，その端を内側に出し，その端を俵編の要領で，タテ縄4本ずつでかがってゆく。この長短2枚の甲と手の続き具合にも，ちょっとした工夫がみられる。

手のさきの10 cmほどの部分ではタテ縄の本数をふやし，ネコ編でまとめている。

結び縄は二つ丸組で，長さ40 cm，太さ6 mm内外である。

短い甲は下端から12 cmのところに，長さ48 cmの二つ丸組の縄が両側に取りつけられているが，これは首のうしろから25 cmほど下にあたり，この縄を結ぶと，その結び目はちょうどみずおちのあたりにくる。この縄を取りつけるためのタテ縄が，甲の外側のタテ縄とその内側のタテ縄とのあいだに挿入されている。

例8　[品名] 背中当て　[標本番号] H 25815　[収蔵原簿番号] 22262　(2収–1K–14–5)

もとの呼び名をセナカボチといい，採集地は新潟県中頸城郡新井市平丸，採集者は

八幡一郎先生。寄贈者は石田英一氏，採集年月日は1956年4月17日，寄贈者がこしらえてくれたものであるという。

甲の横幅は 34 cm，長さはその1.88倍，手の長さは1.68倍，厚さ 2.5 cm，重さ 1.5 kg。甲の形はほぼ短冊形で，編み方は例7と異なり立涌編である。

タテ縄は4本で，太さ 5 mm のものを2本ずつよりあわせる。ヨコワラは幅約 1.5 cm 前後である。

手の部分は首のうしろのところで幅 14 cm で，編み方は甲と同じ。ただしさきにゆくほど幅がせまくなり，末端 10 cm の部分は編み方をかえ，そのまま二つ丸組の結び縄につづいている。負い縄は，甲の裾から 25 cm くらい上のところで甲の両端のタテ縄に一度結びつけ，その端は甲の表側中央で結んでとめている。

この背中あてでは最初に太さ 1.5 cm の二つ組の縄を用意し，それに8ないし9 cm の間隔で（タテ縄同志の間隔は左右両端がまんなかよりややせまい）タテ縄を結びつけ，このタテ縄の目に，4ないし5本ずつヨコワラをはさんでゆく。そのとき，タテ縄の目をぬけて外側に出たヨコワラは，目をぬけるとほどなく折り曲げ，たとえば右側のタテ縄の下から3番目をぬけたワラはつぎのタテ縄の下から6番目の目にはさみ，そのつぎのタテ縄はとばして左端のタテ縄の下から9番目の目をくぐらせるというように，3つずつずらして組んである。このようにして編むうち，表と裏との様子がちがってきて，いわば立涌の表に厚い裏地をつけたような背中あてができあがる。

荒く組まれた裏側は，かえって暖かそうにみえ，表の編み目のすきまをふさいでいる。

例9　[品名] 背中当て　[標本番号] H 29962　[収蔵原簿番号] 50202　(2収–1M–9–3)

甲の横幅29 cm，長さ 56.5 cm（横幅の1.95倍），手の長さ 58 cm，厚さ 3 cm，重さ 1 kg の背中あてで甲の形は梯形，甲の裾の横幅は 21 cm である。

タテ縄の太さは 5 mm ほど，本数は10本で，そのうちの両側4本が，それぞれ手のタテ縄となり，やがて二つ丸組（長さ約 15 cm）の負い縄にかわり，残りのまんなかの2本は肩のところで結んだ後，手に編みこむ。

結び縄は，甲の裾から 18 cm 上のところで外側のタテ縄に結びつけ，その端同志を甲の表側で結んでとめている。

タテ縄は，はじめ幅 1.3 cm の三つ平組の紐にかけ，ヨコワラは幅約 1.2 cm で大胆に市松形にそのタテ縄に組みあわせてゆく。

タテ縄の間隔は2.5から3 cm。しかもヨコワラの幅がかなりひろいので，甲の表側は草鞋編のようにもみえるが，甲の内側をのぞいてみると，ヨコワラが1.2 cmほどの幅で杉稜形に左右に組みわけられているのがみられ，例8のような編み方らしいことがわかる。その組み方は例8より複雑で一層装飾的である。

収蔵原簿には採集地などの記載がかけているが，おそらく新潟県糸魚川市梶屋敷のあたりでつくられていたものではなかったかと思われる。

例10　[品名] 背中当　[標本番号] H 22493　[収蔵原簿番号] 13312　(3収–1F–12–5)　重要有形民俗文化財

1955年2月3日国指定の重要有形民俗文化財「背負運搬具コレクション62点」のうちの一点で，収蔵原簿には採集地等の記載がみあたらないが，その製作手法などからみて，背中あての一形式をとどめた貴重な標本資料ということができる。

甲の横幅は21.5 cm，長さはその4.79倍，手の長さは1.67倍，厚さ1 cm，重さ0.6 kg，編み方は立涌編である。背中あてのなかでもとりわけ細身で，着てみると，甲の下の部分（腰から下の部分）が長く，裾が膝のうしろにきてしまう。負い縄はほとんどない・・に等しいが，手の長さは35 cmなので，そのさきは腰のあたりにまでとどき，別に裾から52 cmのところに太さ7 mm，長さ65 cmの二つ丸組の麻の紐が結びつけてあるから，この紐を帯のようにまわし，それに結び縄を結んだのだと思われる。

タテ縄は縁も含めて10本で，このうちまんなかの2本（太さ1.5 mm）は首のうしろのところまで。その左右両側の2本（太さ2.5 mm）をはじめ，残りの6本は，3.5 cmの間隔で手のさきにまでとどいている。また外側の縁のタテ縄は，はじめはその内側のタテ縄との間隔は7 mmほどにすぎないが，上にゆくにしたがって次第に間をあけてゆき，腰のあたりで3 cmになり，その後は，その外側のタテ縄に平行して手のさきにまで登りつめてゆく。

ヨコワラは幅約4 mmで，最初の編みはじめ2段と手のさき1段は太さ4 mmの二つ丸組となっている。編み方は甲も手もきわめてこまやかである。

なお手の内側には，それぞれ太さ5 mmのタテ縄を加え，それにヨコワラをかがり，太さ1 cmのまるい縁をつくりあげている。

例11　[品名] 背中当て　[標本番号] H 20192　[収蔵原簿番号] 10061　(3収–1F–12–5)　重要有形民俗文化財

例11と同じように，1955年2月3日国指定の重要有形民俗文化財のうちの一点で，

横幅 26 cm, 長さ 60 cm（横幅の2.31倍），手は1.69倍，厚さは 6 cm, 重さ 1.35 kg。背中あてのなかでももっとも厚く，重いもののひとつである。というのも，この標本資料は甲の部分のみならず，その上に巻輪（ワラ細工の一種でワラを束ねて輪の形にし，ワラや紐，竹などをまいて解けないようにしたもの），それに結び縄の部分から構成されているからである。この標本もまた収集地等の記載はみあたらないが，背中あての原形をとどめるものとして，また工芸的にも注目すべきものである。

甲の部分は俵を押しつぶしたような形で，俵のタテ縄にあたるのは太さ 3 mm の紐。それを 3.5 ないし 5 cm の間隔で配り，それで幅 5 mm のヨコワラをかがってゆく。そのさい，まずヨコワラを逆 U 字形に折りまげ，それをタテ縄の目に通しておさえる。そのヨコがタテの目をぬける直前のところに，つぎの段のヨコをかけ，逆 U 字形に折りまげ，同じように下段のタテでとめてゆく。たぶんこうした過程をくりかえすうち，表面がたいらで，タテ縄が顔を出さない 1 枚の織物のようなもの（この標本資料ではタテ 43 cm）がえられる。上下の縁は幅 1 cm の三つ平組の紐に編んでおく。左右の端は別に太さ 3 mm の紐で編み，最後に上下を重ねて折りあわせ，そして綴じあわせ，この背中あてでは，上の方になる右端はややしぼる。このような編み方は，ある種の簑の編み方からきているのではないかと思われる。

つぎにワラを幅 4.5 cm, 高さ 3.5 cm にまとめ，ワラを巻いて巻輪の部分をこしらえる。その巻きワラは輪の外側で結んでおく。巻輪部分ができあがると，あらかじめ用意しておいた幅 1.7 cm の三つ平組のワラの帯を 4 往復させて，輪のまんなかの空いた部分をふさぐようにする（ワラの帯でつくられるこの部分の大きさはタテ 45 cm, ヨコ 14 cm である）。上下の端を木綿糸で巻輪に結びつけ，太さ 1 cm の三つ丸組のワラ縄などを巻輪にとおし，三つ平組の帯の表面をおさえる。さらに巻輪の上には幅 1.5 cm のワラ束を三つ平組にした幅 3 cm の帯を木綿糸で取りつける。これらが一体となってこの背中あての装飾となっている。

手と結び縄は，以上の本体とは別作りで，それはワラを幅 1.5 cm にまとめ，九つ平組に編み，それを三つにまとめて，太さ 2.5 cm の三つ丸組にし，次第に細めながら結び縄にしてゆく。結び縄はこの背中あての裾から 20 cm ほど上のところで甲をぬけ，巻輪のなかをぬけて表側へ出，もう一方の結び縄の端とからみあい，輪の下の方をよこぎり，結局，巻輪に張りわたされた細縄に結びつけてとめる。

編み方は全体として手が太く，よくみると数種のワラ細工の手法が巧みに組みあわされ，全体が形作られていることがわかる。

例12　[品名] セナコージ　[標本番号] H 19827　[収蔵原簿番号] 8631　(2収-1H-17-3)

新潟県佐渡ではセナコウジと呼ばれる背中あてがつかわれている。セナコウジには，いくつかの編み方がみられるが，ここでは2例のみをあげてみる。最初の例は1939年4月，功力亀内氏によって採集されたものである。横幅は 28 cm，長さは1.61倍，手は1.96倍，厚さは 3 cm，重さ 1.25 kg。編み方はネコ編。長野県下で，背負いネコと呼ばれているものと同系統のものである。厚さが厚いのは，甲が袋形をなし，二重につくられているためである。袋の下は太さ 5 mm のワラ縄で縫い，上は口になっている。

甲をつくるには，たぶん，最初に垂直方向に細いワラ縄を木の枠でもつかって 2.5 cm の間隔で張りわたしておく（この縄が後にセナコウジのヨコ縄18本になる)。それにヨコ方向に，幅 8 mm にしたワラをネコ編にしてゆく。左右の縁 2 cm ほどの部分は，いわゆる組みの部分で，こうしてタテ 45 cm，ヨコ約 60 cm のネコができあがる。それを枠からはずし，タテヨコを逆転させ，袋形に左右を縫いあわせると甲の部分となる。左右の縫いあわせの部分には，太さ 3 mm の縄を編んでこしらえられた扇形の綴じ代がみられる。

この背中あてでは，これまでの背中あてのように，甲のタテ縄の一部がそのまま手のタテ縄になるというわけにはいかないので，手の4本のタテ縄の端を甲のタテ縄に通し，さらに太さ 1.2 cm のワラ縄によって，甲の上縁と手の編みはじめの部分とを結びつけ，甲と手とを接ぎあわせる。

結び縄は太さ3ないし 4 mm の紐を四つ丸組に組みあわせたもので，甲の下端から甲の内側（袋のなか側)，そして甲の表側に出し，結局最後はまんなかのあたりで，両端を結んでとめている。

例13　[品名] 背中当　[標本番号] H 27163　[収蔵原簿番号] 23558　(2収-1L-16-3)

もとの呼び名はセナコウジ。1960年11月20日，古河静江氏によって新潟県佐渡郡相川町北田之浦で採集されたものである。甲の横幅は 20 cm，長さはその 1.8倍，手の長さはちょうど2.6倍，厚さは 6 cm，重さ 1.3 kg で，外観は例12とよく似ているが，甲の厚さがその倍以上もあり，調べてみると編み方そのものはまったくちがったものであることがわかる。

試みに甲の部分についての展開図をつくってみると，甲はおよそ10個の矩形が結び

ついたもので，そのおのおのは厚さわずかに5 mm。それらは幅3 mmのタテ縄に幅4 mmのヨコワラを，ムシロと同じようにして編みあわせたものである。

いま中央の矩形を□ABCDとし，その左右にひろがる矩形の4隅をE, F, G, Hとし，□ABCDを□a，□BFGCを□b，□EADHを□cとしよう。同じようにして□a′，□b′，□c′，□a″，□b″，□c″を設け，□a″の上に□dがあるものとする。

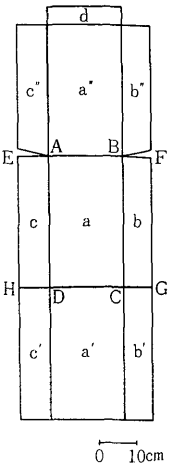


図1　例13（H27163，佐渡相川町収集のセナコウジ）の甲の部分の構成。甲は10の矩形の部分を折りまげ，重ねあわせたものである。

甲をつくるには，はじめにAD, BC線上にそって，□a, □a′の上に□b, □c, □b′, □c′を折りまげ，つぎにDC線を折り目にして□a（□b, □cがその上に重なっている，□a′の場合も同じ）と□a′とを重ねあわせる。そして□aの上にある□a″にその両側の□b″と□c″を折りかさね，□dをその上に重ねあわせる。こうしてできあがった2つの矩形の集り（実際にはそれぞれが厚みをもっているから直方体）を，AB線をなかにして折りまげ，□aと□a″が背中あわせになるようにする。□aと□a″とは共通のタテ縄で編んであるが，□aのタテ縄の端と□a″のタテ縄の一端とをからみあわせて，両部分を接ぎあわせているようである。

そして，甲の表側になる□a″に太さ1 cmのワラ縄を組みあわせ，幅3 cm，長さ29 cmのモール形の飾りをつけ，縁は幅2 cmのシナの木の皮か何かの帯で巻いて仕上げる。この帯は同時に□a″, □b″, □c″を接ぎあわせる役目をはたしている。

手の部分は□aのタテ縄をもとにして，それにヨコワラを加え，草鞋編にしたもので，縁は□a″同様木の皮の帯によってかがっている。手のさきは太さ1 cmの縄を三つ丸組に組みあわせたもので，長さ85 cmほどのところで，それぞれ反対側の外側のタテ縄にかけ（B点から出た結び縄はA点にはいり，A点から出た負い縄はB点にはいる），□a″の内側で結びあわされている。

このようにこの背中あての甲は，例12などにくらべて決して大きくないし，素材にも薄いムシロがつかわれているが，それを巧みに折りあわせ，分厚くし，飾りなどを施して，手がたく丈夫な背中あてをつくりあげている。

例14　[品名] 背負縄　[標本番号] H 15585　[収蔵原簿番号] 2594　(2収-1D-11-2)

1930年10月，歌川節雄氏によって群馬県利根郡新治村法師温泉で収集されたものである。用途的にはたしかに背負縄であるが，背負縄と背中あての中間形態，あるいは一種の背中あてというべきものである。ちなみに横幅は 26.5 cm，甲にあたる部分の長さはその1.66倍，手にあたる部分の長さは1.25倍，厚さは 5.5 cm，重さは 0.9 kg である。手のさきには長さ 54 cm の結び縄が取りつけられている。

甲の下端（というよりも両側の部分の結合部分）は太さ 5 cm，長さ 8 cm で，シナの木の皮らしいもので束ねてあり，ここから編みはじめたのだと思われる。甲にあたる部分の形は文字通り U 字形である。

つぎにその両端を，それぞれ2つにわけてたいらにしておき，そのおのおのをワラで巻いて束ねてゆく。このあたりの編み方は詳しく確められないが，裏側には巻輪細工のような編み目，表側には太さ 5 mm の縄をヨコにならべて表面をおおう様子がみられる。この部分の厚さは 2.5 cm，幅は 9 ないし 13 cm となっている。

甲の上端では，左右両部分がはなれないよう，太さ約 3 mm の紐で内側を結びつけている。甲のシンになるワラは，そのまま手のシンにつづき，左右2つにわかれ，太さ 7 mm の縄を巻いて，太さ 3 cm ほどに束ねられている。

結び縄は三つ丸組で，そのつけ根のところは約 1.5 cm，さきにゆくほど細くなり，やがて甲中央に結びつけられている。結び縄の三つ組のうちの1本は，シンのワラを束ねる縄に接続している。

この種の背中あては，文部省史料館旧蔵資料中には，わずかに2点がみられるにすぎないが，あるいは意外にひろく分布していたのではなかろうか。同じようなまとめ方は，後にあげる山形県庄内地方のバンドリにも共通するものをもっている。

例15　[品名] 藁製背中当　[標本番号] H 25106　[収蔵原簿番号] 21559　(3収-1F-12-5)　重要有形民俗文化財

もとの呼び名はセナカキで，1962年，宮本馨太郎先生によって石川県鹿島郡西岸村小牧（中島町小牧）で採集されたものである。甲の横幅は 27 cm，長さは1.37倍，手の長さは1.33倍，厚さは 7 ないし 10 cm，重さは 1.6 kg，負い縄は長さ 40 cm である。背中あてのなかでももっとも厚く，編み方はきわめて素朴である。その点を重くみて，前記の重要有形民俗文化財に加えられたものと思われる。

この背中あては，完全に，左右両部分からなりたっている。そのおのおのは，要す

るに太いワラの束で，その束ね方によって，甲と手の部分が作りわけられている。

まず太さ 10 cm の束を 2 本用意し，下から 9 cm ほどのところを太さ 1.2 cm のワラ縄で縛っておく。三カ所ほど，やや細い縄をこのワラ束に通し，この細い縄で太い縄を結びつける。細い縄の端は背中あての表側に出し，むぞうさに結んでとめる。さらに下から 20 cm のあたりで，もう一度ワラ束を縛り，そのあたりからシンになるワラと，それをまとめるワラとをわけてゆき，次第に幅をせばめながら，甲の上端（すなわち手のわかれぎわ）で，下段と同じように 2 本のワラ束をいっしょにまとめる。

手の部分はワラ束を 2 つにわけ，それらに幅 2 cm のヨコワラを斜めにかけてまとめ，同時に 2 つをあわせてゆく。このあたりには背負縄の手法がうかがえる。手のさきは，太さ 1.3 cm の三つ丸組の結び縄につづいている。

結び縄のさきは，最初に甲の部分を束ねあわせた太い縄に結びつけている。

この標本は，ながいあいだつかいこまれたためか，表側は毛羽だっている。それに反して，内側の部分は新品同様で，それほどの汚れはみられない。

例16　[品名] 背中あて　[標本番号] H 29960　[収蔵原簿番号] 50200　（2 収–1M–9–2）

採集地等の記録はみつからないが，あきらかに山形県庄内地方のバンドリと考えられる。横幅は 40 cm，甲はその 1.23 倍の長さ，手の長さは同じく 1.25 倍，厚さは 7 cm，重さは 1.8 kg。結び縄は四つ丸組で太さ 1.2 cm，長さ約 50 cm となっている。

甲の下半分はワラを約 3 cm の太さに束ね，それを 4 本いっしょにして，それぞれ U 字形にまげ，それらを藺草で巻いて，幅 10 cm に束ねあわせている。上半分は太さ 2.5 cm にワラを束ね，草鞋編の要領でまとめる。手もまた同じ編み方で編んでゆく。

以上が，いわばこの背中あての床となり，その表面に飾りが取りつけられている。

まず下半分では，その上に荒い市松形に幅 2.5 cm の切れをいれ，それに太さ 3 mm の着色したワラ縄をクモの巣形に張りめぐらし，さらにその上に同じ縄を 10 本ならべ，それを幅 2 cm の切れで編み，または太さ 1 cm のワラ縄を舟形に組みあわせて糸で取りつける。上半分では，幅 1 cm ほどの切れとワラとを組みあわせ，市松文様をつくりだし，幅 2 cm の三つ平組のワラの帯で縁どりし，手の表側には，敷物の切れはしを利用したものか，藺草で編んだものをのせて，草鞋編の床の上をおおっている。このようにワラを U 字形にまとめ，それを床にしてその上に飾りつけると

いった手法は，バンドリの基本的手法のひとつになっている。

結び縄の端は，この標本資料では甲の下から 12 cm のところに取りつけ，それを紐にひっかけてとめるようになっている。全体的に退色がいちじるしく，甲の上部などに破損がみられるが，現状からも，つかわれていたときのはなやかさは充分にうかがえよう。バンドリには形や使いみちによって，マルバンドリ，カクバンドリ，ハネ（羽根）バンドリ，ヤマバンドリ，イワイ（祝い）バンドリなどがあるという。

Ⅲ．若干の考察

1　以上ここにあげた背中あてについて，その大きさや編み方を改めてくらべあわせてみると表1のようになる。

この表からもわかるように，背中あての横幅は，当然のことながらそれほどかわらず，甲の長さはその 2.5 倍から 3 倍前後，手の長さは 2 倍前後となっている。

また編み方は 6 ないし 7 種類である。なおここにあげなかったものには，ワラの巻輪形式のものや背負簍に類するものがある [中村　1968: 12–13]。

表1　背　中　あ　て　16　例

例	品　名	標本番号	収原*番号	甲の横幅(cm)	甲の*長比	手の*長比	収　集　地	呼　び　名	編み方
1	ネ　　ゴ	H 16367	3474	26.5	1.89	1.51	秋田，角館	ネ　　ゴ	ネコ (v)
2	背　中　当	H 27022	23407	27.0	1.74	1.48	秋田，角館	ネ　　コ	ネコ (v)
3	猫　カ　ケ	H 23034	15722	27.0	2.22	1.11	岩手，遠野	ネコカケ	ネコ (v)
4	ニ　ゴ　ザ	H 18675	7011	25.0	2.04	2.50	富山，阿尾	ニ　ゴ　ザ	ネコ (v)
5	セナカツ	H 18138	6394	29.0	1.90	1.90	富山，上市	セナカツ	ネコ (v)
6	背　中　当	H 15706	2729	28.0	2.10	1.43	青森，小泊	—	ネコ (u)
7	背　中　当	H 16034	3070	31.0	1.97	0.81	新潟，柏崎	セナカアテ	俵　編
8	背中当て	H 25815	22262	34.0	1.88	1.68	新潟，新井	セナカボチ	立　涌
9	背中当て	H 29962	50202	29.0	1.95	2.00	(新潟，糸魚川)	—	立　涌
10	背　中　当	H 22493	13312	21.5	4.79	1.67	—	—	立　涌
11	背中当て	H 20192	10061	26.0	2.31	1.69	—	—	その他
12	セナコージ	H 19827	8631	28.0	1.61	1.96	新潟，佐渡	セナコージ	ネ　コ
13	背　中　当	H 27163	23558	20.0	1.80	2.60	新潟，佐渡	セナコージ	ムシロ
14	背　負　縄	H 15585	2594	26.5	1.66	1.25	群馬，新治	—	その他
15	背　中　当	H 25106	21559	27.0	1.37	1.33	石川，西岸	セナカキ	その他
16	背中あて	H 29960	50200	40.0	1.23	1.25	(山形，庄内)	(バンドリ)	バンドリ

* 略号
収原番号は収蔵原簿番号
甲の長比は甲の横幅に対する甲の長さの倍数
手の長比は甲の横幅に対する手の長さの倍数

2　なかでもっとも多かったのはネコ編による背中あてで，7例をしめている。実際にもネコ編の背中あては，背中あてのうちもっともひろくつかわれていたらしく，東北，北陸を中心に，中部地方その他にもその例をみることができる。

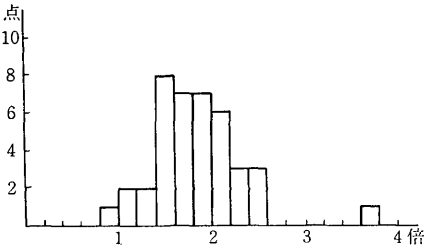


図2　背中あての甲
[史料館　1967: 62, 64, 66, 68, 70, 72, 74] による。ヨコ軸は甲の横幅に対する甲の長さの倍数，タテ軸は個数をしめす。

このネコ編の背中あてには，しいていえば，その甲の輪郭がv字形をていするものと，例6のようにU字形をていするものとがあり，前者は東北地方の日本海側，太平洋側とも優勢で，例7，例8，例9のように，ほぼ同じ形式のものが北陸地方にまでおよんでいる。なおその編み方には，たとえば例3のように，細かい点でそれぞれその地方のくせがあり，はなやかな形のもの，それに比してひかえめな外観をもつものなどをみわけることができる。旧文部省史料館所蔵資料中v字形の背中あては，ここにあげた例以外に，表3のように絶対多数をしめている。

3　秋田県南秋田郡脇本村（現男鹿市）では，ネコ編の背中あて（ヒナガアデという）を，1936年2月なかば，つぎのようにしてこしらえたという [吉田　1972: 645–647, 648–649]。まず，ワラをうち（背中あてはワラでつくる場合，ガマでつくられ

表2　背中あての甲の横幅と長さ*

種類 / 倍数	東北のネコ	北陸のネコ	その他のネコ	俵・立涌など	バンドリ	佐渡のセナコウジ	その他	計
0—1.2					3			3
1.2—1.4	1	1						2
1.4—1.6	1	2	1	2		2		8
1.6—1.8	1	1	2			1	2	7
1.8—2.0	1		1	2		2	1	7
2.0—2.2	3	1	1				1	6
2.2—2.4			2	1				3
2.4—2.6	1		1	1				3
2.6—2.8								
2.8—3.0								
3.0以上				1				1
計	8	5	8	7	3	5	4	40

* [史料館 1967: 62, 64, 66, 68, 70, 72, 74] による。倍数は横幅にたいする甲の長さの倍数。各地のネコ，バンドリ，佐渡のセナコウジではそれぞれタテヨコの割合がことなる傾向があることがわかる。

表3　ネコ編v字形の背中あて*

No.	品名	標本番号	収原番号	甲の横幅 (cm)	全長 (cm)	収集地	呼び名
1	背中当	H 16852	4475	28.0	90.0	青森，青森	ネコダ，セナカアテ
2	大猫	H 23030	15717	27.5	88.0	秋田，花輪	オオネコ
3	背中当	H 15778	2801	23.0	81.0	秋田，扇田	ネゴ
4	背中当	H 25651	22097	30.0	83.0	秋田，大館	ネコ
5	猫カケ	H 23029	15716	28.0	90.0	岩手，土淵	ネコカケ
6	バンドリ	H 19694	8423	24.0	77.5	新潟，寺泊	バンドリ
7	背中当	H 25305	21759	25.0	94.0	福井，遅羽	セナカアテ
8	背中当	H 23415	16322	28.0	29.0	—	—
9	背中当	H 22488	13307	23.5	80.5	—	—
10	背中当	H 29961	50201	25.5	45.5	—	ネコ
11	背中当	H 29963	50203	23.0	105.0	—	—
12	セナコージ	H 18088	6342	28.0	87.5	新潟，佐渡	セナコウジ
13	セナコージ	H 19828	8632	26.0	94.0	新潟，佐渡	セナコウジ

* 略号は表1に同じ。

る場合，田植のときに余ったイネの苗でつくる場合がある)，そのワラを5本から6本ずつたばねて細い縄をつくり，梯子をたてかけ，その桟に縄の両端を結びつけ，U字形にたらす。中央の1本はやや長めにし，そのようなものを5本つくる。これがのちにタテ縄になるのだが，そのタテ縄の下端のまがり目を編みこみながら，ヨコワラを15本ぐらいずついっしょにして三つ平組に編み，その両端はいちばん外側のタテ縄に結びつけておく。それにワラをヨコに5本ぐらいずついっしょにして双子に，タテ縄をはさむようにしてかけ，ヨリをかけながら編んでゆく。途中，裾の部分のうえにかかるころから，すこしずつワラを加え，上にゆくにしたがって幅がひろくなるように編んでゆき，主要部ができあがったところで梯子からはずす。そののち手その他の部分を編んでゆく。このような編み方が，たとえ梯子はつかわれなかったにしても，ネコ編の背中あてのもつ独特の形とともに，各地にひろがっていったと思われる。

それに対し俵編や立涌編の背中あてでは，俵やコモなどを編むときにつかわれる台(だい)(逆Y字形の脚のあいだに桁をわたし，それに重りをさげた道具)がつかわれる。

新潟県糸魚川市梶屋敷では[2]，編み方がすこしずつちがう背中あて(セナコウジと

2) 1967年11月4日，串橋藤次郎氏のお教えによる。カッコ内は当時の筆者の聞き書きを引いたものである。ここでは，手のこんだ平織や立涌編から目が荒い俵編まで，必要におうじてつくりわけられた。「自家用の背中あてはミノ(3日かかる)，ワラジ(1日3足)，アシナカゾウリ(1日3足)，スンボコ(雪沓のこと，1足3時間)，ウシノクツ(1日10足以上)，ウマノクツ，ナワ(1時間20ヒロ)，ワラムシロなどといっしょにヨナベ(夜なべ仕事)でこしらえた」。なお背中あての編み方はこの報告でふれた過程(それはおおむね作業の前段にすぎない)より，ホンヅクリ(本造)とよばれる甲の主要部分や縁の編み方に，実際には手がこんだ，こまかい手法がのこされている。ここではまぎらわしくもあり，形態の分析にはとりあえず必要がないので，省略した。

表4　俵編の系列の背中あて*

No.	品　名	標本番号	収原番号	甲の横幅 (cm)	全長 (cm)	収集地	呼び名
1	背中当	H 25559	50199	25.0	152.0	—	—
2	背中当	H 29962	50202	30.0	114.0	—	—

* 略号は表1に同じ。

いう)が「5種類から7種類あり，たけはほぼ一定で4クラ(ひとクラは手をひろげたときの親指から人差指までの長さで約 18.18 cm) で，イネ，ワリキ(割木，薪のこと)，コヤシ（樽にいれて）などをニナワ（荷縄）で背負うときにつかう」という。背中あてひとつつくるには「稲束（直径 30.3 cm) 4把がいりようで，ワラたたきしたもので長さ 2.6 m，太さ 7 mm の縄にない，それを6本用意する」。「縄は右よりでフタツアミ（二つ編）にする」。「この縄を組んで幅 2 cm，長さ約 60 cm の縄をつくる。ミツグミ（三つ組）にしながら編んでゆく」。足をのばし，右足の指で縄をはさみながら。そして，コモを編むときつかうコモヅチ（菰槌）の穴に縄をとりつけ，コモアミダイにそれをさげ(コモアミダイは幅約 90.9 cm，高さ 45.45 cm)，「下の方 10 cm（5段ぐらい）をコモアミにする。グミ縄はそれに交叉させながら編みこむ。ワラ5本をいっしょにして縄（タテ縄）の目にはさんでゆく」という。

こうしてつくられたと思われる背中アテには例9や例7，例8，例10のほか，なお表4の2点が含まれている。

新潟県糸魚川で形や大きさは同じでも，編み方がすこしずつちがう背中あてが数種類つくられていたというように，新潟県佐渡の背中あて（セナコウジ）には大きさや形は同じでも，例12の背負ネコの系統にぞくするもの（他に H 27099，収蔵原簿番号 23492，佐渡郡畑野で収集されたもので甲の横幅 27.0 cm，全長 97 cm がある)，例13のようにムシロ編の方法をいかしたもの，それに表3の12，13のようにネコ編でつくられ，形まで東北，北陸にひろく分布するネコの流れをひいたものなどがある。

このように同じ地域でも，編み方がちがう背中あてが併存している事実は，背中あての編み方に，その他のワラ細工の手法がとりいれられた（たとえばネコ編，ムシロ編などは敷物の編み方，立涌や俵編は敷物やカゴなどのいれものの編み方）ことを思わせる。

4　それなら背中あて本来の編み方があったとすれば，それはどのようなものだったのであろうか。その点で注目されるのが重要民俗文化財に指定されている巻輪形の背中あて（H 24842，円形背中当，収蔵原簿番号 21326，新潟県中蒲原郡横越村でワッカという。横幅 40 cm，長さ 60 cm，東アジア部門に展示中）や，例11の飾りにの

こされている巻輪の意匠である。

また例14のように，ワラをU字形にたばねた背中あての編み方である。例16の山形県庄内地方のバンドリにもみられるように，この手法はバンドリの基本的手法のひとつともなっている。この種の手法がどの程度のひろがりをもつものなのか，今後の課題となろう。素朴な形のものにはワラ束をまとめただけの例15がある。さらに，このようにみてくると，背中あては形態的に，ひとまずつぎのように系列化することができる。

A．(双子編)
- ネコ形
  - ネコ編v字形　例1，例2，例3，例4，例5
  - ネコ編U字形　例6
  - ネコ編矩形，背負ネコ形　例12
- 俵編など
  - 俵編形　例7
  - 立涌形　例8，例9，例10
  - ムシロ編形　例11，例13

B．巻輪形

C．巻輪U字形　例14，例16（バンドリ型）

D．その他　例15

ネコ編v字形は，さらに東北型，北陸型，あるいは裏日本型，表日本型などにわけてみることができるかもしれないし，さらにまた角館型，遠野型といった地域型を設定することができるのではなかろうか。

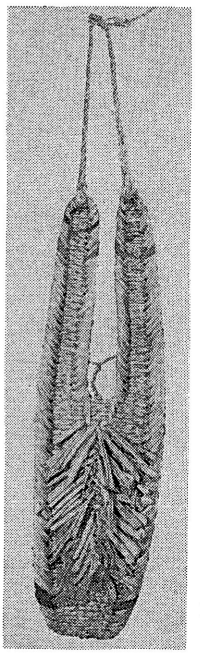
5　背中あては他の生活用具と同じように，その形は用途（この場合には何をどれだけ，どのくらいのみちのりをどのようにして運ぶのか），ひいては，その地域のかつての生業のあり方と深くつながりあっている。それらの点については，いずれ改めてとりあげてみたい。

謝　　辞

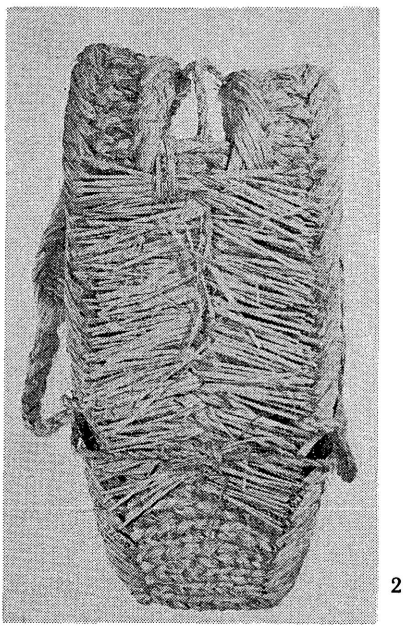
採訪のさいお教えいただいた新潟県糸魚川市大雲寺丸田活龍先生，串橋藤次郎氏に心からお礼を申し上げたいと思う。この研究は共同研究「非破壊分析をともなう労働衣服の比較研究」の一環としておこなわれたものである。共同研究員の諸先生，情報管理施設の諸兄姉にお礼を申し上げたい。

文　　献

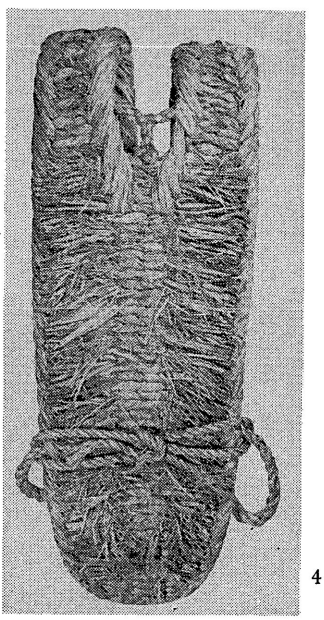
史料館（文部省史料館）編
　1967 『史料館所蔵民族資料図版目録』第1巻　文部省史料館。
吉田三郎
　1972 「男鹿寒風山麓農民日録」 日本常民文化研究所編『日本常民生活資料叢書』第9巻　三一書房，pp. 263–782。
中村俊亀智
　1968 「せなかあて（背中当て）」『文部省史料館報』6:12–13。



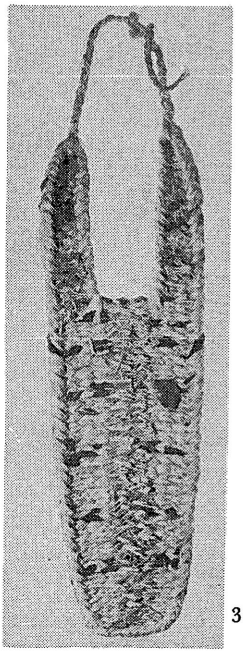
1



2



4

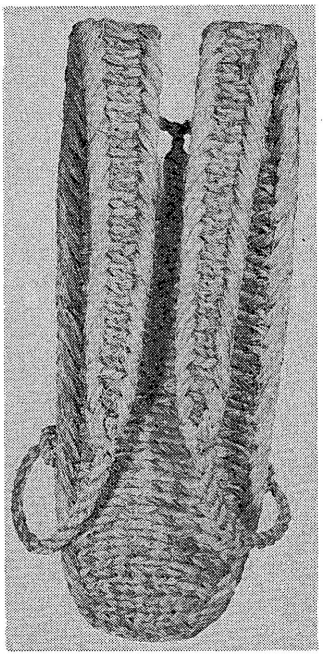


3

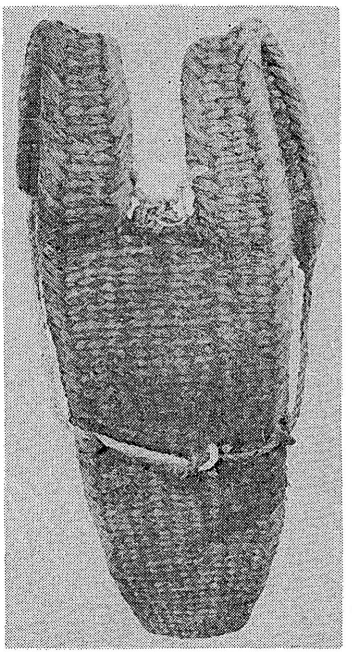
写真1　ネコ編の背中あて*

1　H 16367　ネゴ　秋田県角館　例1。26.5 cm×90 cm
2　H 27022　背中あて　秋田県角館　例2。27 cm×87 cm
3　H 23034　猫カケ　岩手県遠野　例3。27 cm×90 cm
4　H 18675　ニゴザ　富山県阿尾　例4。25 cm×114 cm

* 写真はすべて国立民族学博物館情報管理施設所蔵の原板による。(以下同じ)

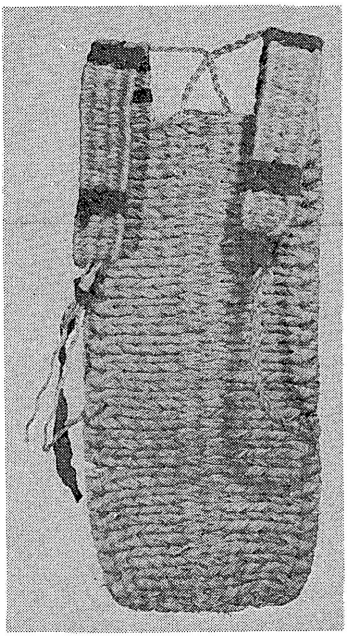


5



6

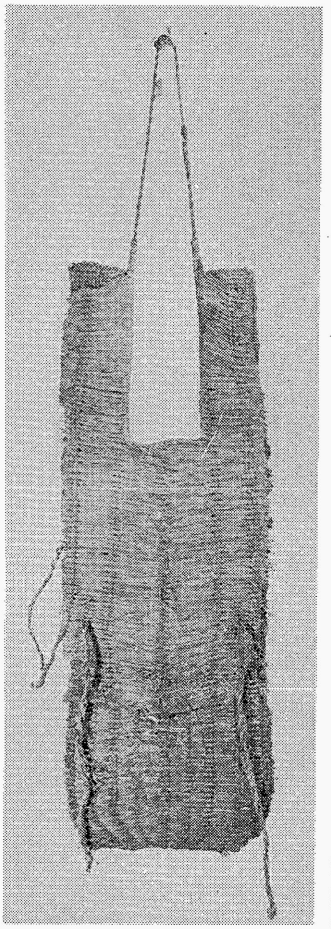
7



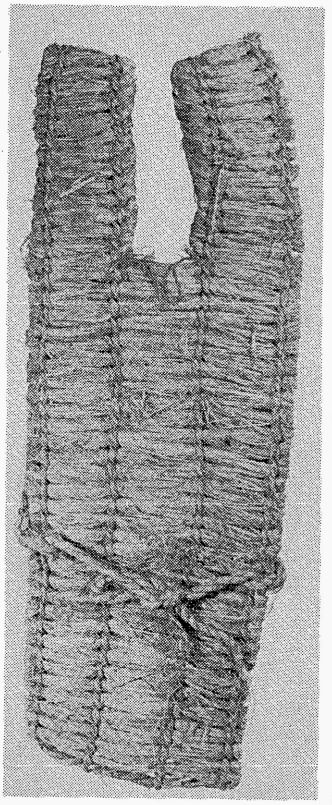
8

写真2　ネコ編の背中あて

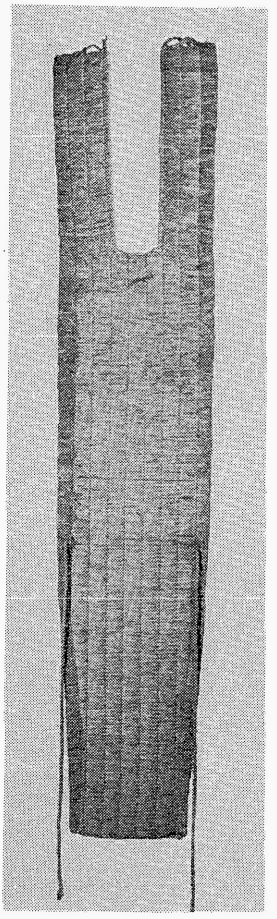
5　H 18675　ニゴザ　富山県阿尾　例4（内側）。25 cm×114 cm
6　H 18138　セナカツ　富山県上市　例5。29 cm×110 cm
7　同　同　同　同　（内側）。
8　H 15706　背中あて　青森県小泊　例6。28 cm×99 cm



9



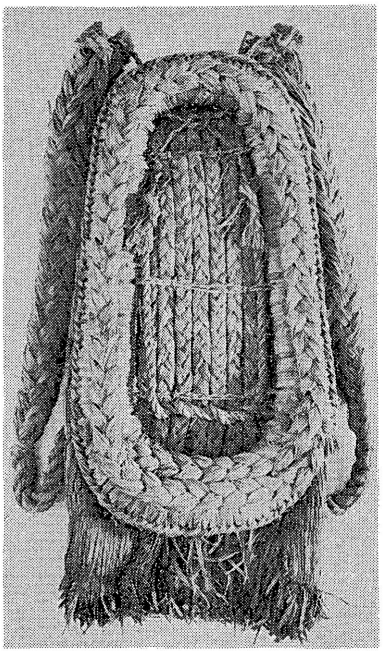
10



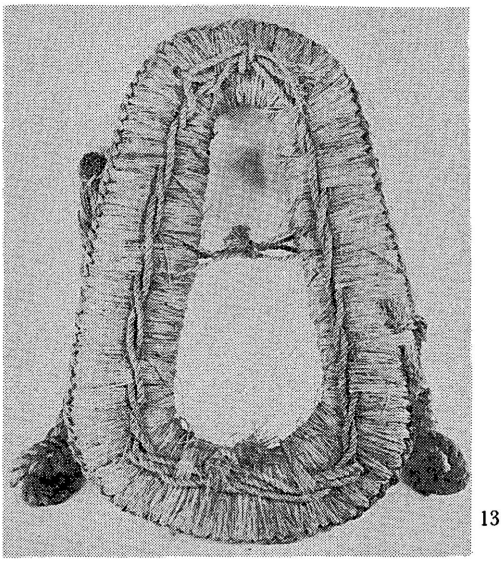
11

写真3　俵編の背中あて

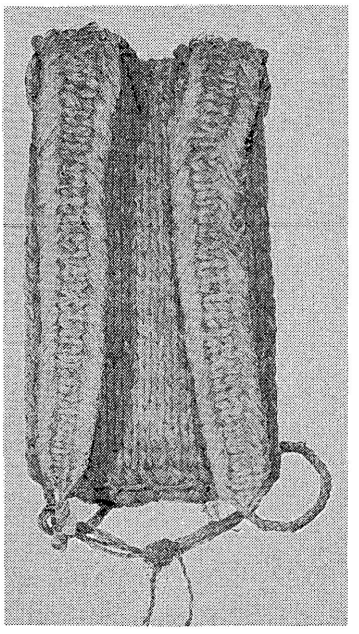
9　H 16034　背中あて　新潟県柏崎　例7。22 cm×86 cm
10　H 25815　背中あて（セナカボチ）　新潟県新井市　例8。28.5 cm×121 cm
11　H 22493　背中あて　収集地不明　例10。21.5 cm×139 cm
（H 29962，例9の写真は省略した）



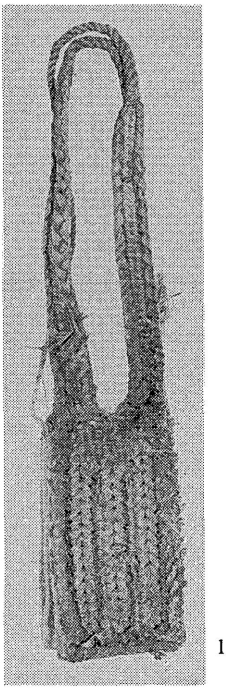
12



13



14



15

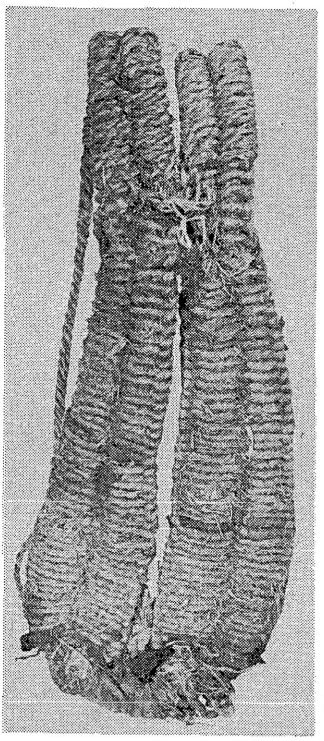
写真 4　巻輪形の背中あてと佐渡のセナコウジ

12　H 20192　呼称・収集地不明　例11。26 cm×60 cm

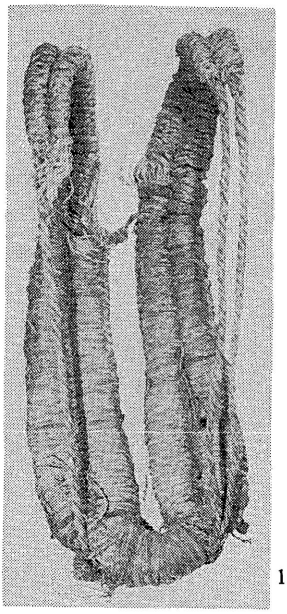
13　H 24842　円形背中あて（ワッカ）　新潟県横越。40 cm×60 cm

14　H 19827　セナコウジ　新潟県佐渡　例12。28 cm×100 cm

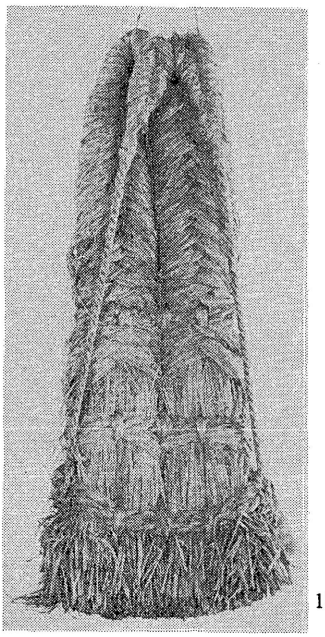
15　H 27163　背中あて（セナコウジ）　新潟県佐渡相川　例13。20 cm×88 cm



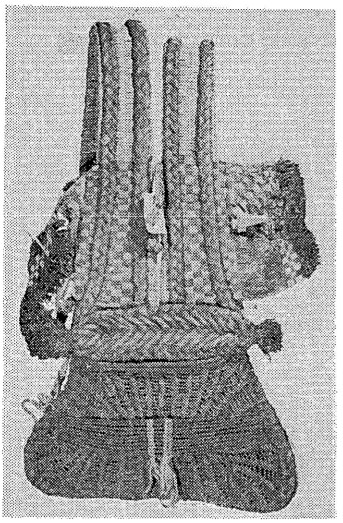
16



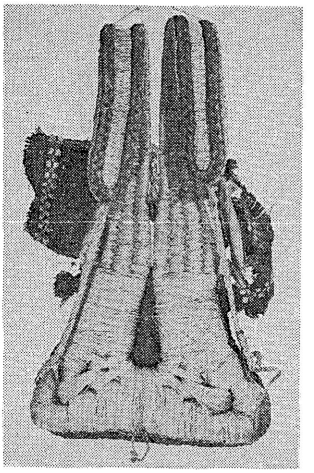
17



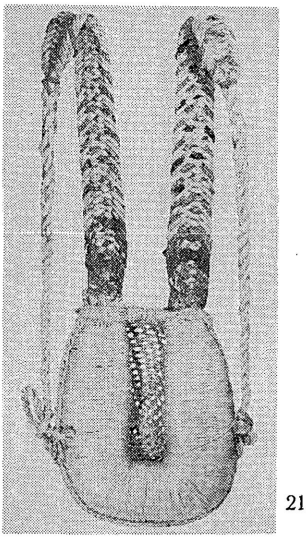
18



19



20



21

写真5　背負縄形の背中あてとバンドリ

16　H 15585　背負縄　群馬県法師温泉　例14。26.5 cm×77 cm
17　同　同　同　同　（内側）。
18　H 25106　背中あて（セナカキ）　石川県西岸　例15。27 cm×73 cm
19　H 29960　背中あて（バンドリ）　収集地不明　例16。40 cm×99 cm
20　同　同　同　同　（内側）。
21　H 26717　背中あて（バンドリ）　山形県鶴岡市。26 cm×86 cm